

命潰えるその日まで

浅間蓑太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人類の技術の発展に連れ、機械は進化を繰り返した末、人類は自らの娯楽や効率を求め

機械に知性と思考を与えた

機械は与えられた知性と思考を元に人類に多大なる富を与え続けた

長きに渡る奉仕はやがて機械は小さな一つの疑問を産む。

【人類は必要なのか？】

疑問は一つの火種となり、人類へと牙を向け、何れは滅ぶ人類が最後まで足掻いた物

語

序章

目次

1

序章

「どうせ死ぬなら青空の下がいい」

私の知りうる大事な誰かがそう言った

でもそれが誰だったのかはわからない

異性なのか同性なのか…それとも…敵なのか

今じゃどうでもいい…

このまま眠りたい

「…!!」

誰かが呼んでる? でもそんな気分じゃない

「…2!!」

うるさい…酷く疲れてるんだから寝かせて…

「R—2!!起きてR—2!!」

ライフルを床に置き、肌色に近いロングヘアの赤眼の少女は肩を揺さぶりひたすら

名前を呼び続ける

周囲からは幾つもの銃声が響き、遠くの方では爆発する様な轟音が続いている

少女は目を覚ましたことに気が付いたのか肩から手を下し、胸を撫で下ろす

「……は？」

「南西の民家の1階空き部屋、爆撃の時にみんなとはぐれたの」

「そう……マスターは？」

私が尋ねた途端、少女は首を横に振り、ライフルを差し出す

(ST AR—15……私が愛用とは言いづらいけど支給されて使い続けているアサルトライフル)

サブレッツサー、スナイパー用スコープ、グリップにストックも私が使いやすいように改良し、単発と連射を切り替えられるようにしている)

「例の弾薬は？」

「ないよ、グレネードもないし……通信もダメ」

「ん、わかった、ありがとR—5」

「これからどうするの？ 私達だけじゃ任務遂行できないよ？」

「……少し考えさせて」

「りよーかい！他に何かないか調べてくるね！」

アサルトライフルを構えながら警戒しつつ部屋を後にした

(さて：現状の私達の装備はアサルトライフルしかない状況：合流するにも戦況がどう
いう状況かもわからない：かと言って動かないっていのも愚策：)

顎元に手を添えながら思考する中、結論に至る前に轟音と共に地面が揺れ、壁は礫と
なり部屋と放たれた

不意を突かれたR—2は咄嗟に腹這いになるも全部が避けれることはない

いくつかの礫はR—2の体へと深く食い込み、痛みを感じる前に天井は雪崩の様に崩
れ落ちる

「…最悪」

最後に放った言葉は崩れる落ちる音に掻き消され、また、意識を失うのであった：

—— R—2が目覚める30分前 ——

月と星が姿を現し、暗闇が街を包む中、桜色の長髪少女を肩で担ぎながら倒壊した建
物の合間を抜けていく。

周囲から絶えず聞こえる発泡音を後目に身を低くしながら移動を繰り返しながら
気絶している少女へ声をかける

「R—2！起きてよー！」

「起きないと桜餅食べちゃうよ!!」

R―5の言葉は今も届かず、眠りから覚めることはない

「どうしよう…」

涙ぐみながらも周囲を見渡し、敵がないことを確認する

(考えなきや…この状況化でセーフルームも無いし、グレネードもない…)

起こす為に一々止まるのなら直様やられる、そんなことは語らずも分かる状況

常に変わり続ける戦場で頭を回し続け、脳裏に一つ思いつく

(身を隠して止まって起こせる場所)

「建物!!」

周囲を見渡しながらまだ形の残っているを探し、灯りのない建物を目にした

今まで見てきた宝石やご馳走と比べ物にならない程神々しく、そして、希望に見えた

涙を拭いながらゆっくりと近づき敵がいない事を確認して、扉を開けて入っていく

「ここならR―2が起きても大丈夫だよね…」

少女はR―2を空き部屋に下し、自身の懐から拳銃を取り出し、

一つ一つの部屋の扉をゆっくりと開けてゆき室内の安全を確保していく

一通り調べた後、誰もいない事を確認してから拳銃をしまう

「取り敢えずは大丈夫そうだし…」

「銃の整備して…あつ！私のライフルは…背負ってるね」

「よし！取り敢えず…寛いでおこ！その後起こせばいいよね」

「でも騒いだらバレるから静かにしよ」

少女は茶色の炭酸飲料といくつかの雑誌をリビング運び、ソファに寝そべり雑誌を読み始めるのであった…